

# 「サンスクリタイゼーション」ノート

## 本部 隆一

ヒンドゥー社会においては、社会の近代化とそれに伴うカーストの変動とは、カーストの解体をもたらさず、むしろ結果的には、カーストの結合の再強化（再カースト化）に結びつくことになった。本稿においては、シュリーニーヴァスによって初めて用いられた、「サンスクリタイゼーション」という概念、すなわち、下層カーストにおける文化変容の問題の検討を通じて、近代化とカーストとのかかわりについての、上記のような「仮説」を呈示することを目的としている。この意味において、本稿は全体として、一つの「問題提起」となるものである。

### 1

ヒンドゥー・カースト（以下「カースト」と略記）<sup>(1)</sup>の、社会集団としての特徴は、概ね、以下の4点に要約することができる、と私は考えている（→本部〔1986 a〕）。

- ① 宗教的集団であること（祭祀の共同）
- ② 内婚集団であること
- ③ 職業集団である（あった）こと
- ④ カースト相互間に上下関係のランキングがあり、相互に排他的であること

周知の通り、カーストに関する研究成果は数多く、これらのなかにおいて、カースト相互間の相互排他性の問題については、カースト研究のいわば「鍵概念」の一つとして、常に注目されるポイントとなっている（→たとえばBouglé〔1908=1943:13-15〕）。しかし、相互排他性と表裏一体の問題である筈の「上下関係のランキング」については、これまであまり注目されることがなかったような印象を受ける。諸カースト間の、上下関係のランキングは、どちらかといえば、所与の、固定的なものと考えられ、その変動の可能性については看過、あるいは否定すらされることが少なくなかった。このことは、たとえばコーザーの、以下の記述などにも端的に示されている。

たとえば社会的流動性が何ら重要視されず、そして宗教的信仰によってカースト階級の身分が正当化されている、インドにおけるように厳しいカースト階級システムにおいては、競争は最小限にとどめられる。下位カースト階級は、上位階級がハイアラーキーのうえでは上位者であることを認めるだろうけれども、自分の属する下位カーストの状況から抜け出すとか、上位カーストの行動と競い合おうとはしないであろう（→Coser〔1956=1978:34〕傍点引用者）。

これを見る限り、コーザーは、下層カーストにおける文化変容や諸カースト間のランキングの変動、更には軋轢や闘争などの可能性を否定しているような印象を受ける。そして、事実、彼は続けて、以下のように結論づけているのである。

伝統的なインドのカースト制度においては、低いカーストも高いカーストもみんな同様にカーストの区別を容認していたから、カースト階級間の闘争はまれであった（→Coser〔1956=1978:36〕傍点引用者）。

ヒンドゥー社会において、すべてのカーストが、結果的に、「カーストの区別を容認」していることは事実であり、このことがカーストの解体を阻む要因の一つとなっているわけであるが、だからといって、すべてのカーストが「みんな同様にカーストの区別を容認」している、とは私には考えられない。また、カーストの区別を容認することと、諸カースト間の上下関係のランキングを所与のものとして受け入れることとは、明らかに別個の問題である。加えて、コーザーは、「ねたみや敵意の感情でおたがいを眺めること」が、あたかも、欧米の「かなりの程度の社会的移動性を許容する階級システム」に特有のものであるかのような理解を示している（→Coser〔1956 = 1978 : 34〕）が、このような理解の仕方は、ヒンドゥー社会、更にはいわゆる「第三世界」一般を、一種の「ユートピア」視するものであるに過ぎない。現実のヒンドゥー社会においては、諸カースト相互間に、ランキングをめぐる「ねたみや敵意」が絶えず存在していること、ランキングの変動を目指したさまざまな試みが行なわれていることを看過すべきではない。このことは、ランキングの流動性の問題に注目した。最近の研究結果（→たとえばDavis〔1983〕）を一見すれば明らかであろう<sup>(2)</sup>。

これに対して、ブレインは、カーストの職業集団としての性格と、「ジャジマーニー」と呼ばれる、諸カースト間の相互依存に関する一連の共同体慣行の機能（→Wiser〔1936〕）とに注目しながら、コーザーとは異った文脈から、ヒンドゥー社会においては「敵意が規範となることはない」という理解を示している（→Brain〔1976=1983 : 136〕）。

保護—被護関係、あるいは儀式による友情は、漠然とした政治上の連関を恒久的な絆に変え、

保護者に下位の者を援助する手段を与える。（中略）インドにおいてさえ、保護—被護関係と友情のテクニックは、カーストの壁をくぐり抜け、カーストやサブ・カーストの異なる個人間の感情的ともいえる強い絆は、下級カーストの者が上級カーストとは完全に無縁だと感じることを防いでいる。階級社会といえども、敵意が常態化するとは限らない。実際、保護—被護関係が下級カーストに浸透しているということは、下級カーストが上級カーストに抗して結束することが妨げられている、ということの意味していた（→Brain〔1976=1983 : 136-137〕）。

ブレインは、諸カースト相互間に、敵意が存在する可能性自体は認めながらも、上層カーストと下層カーストとの間に成立している「保護—被護関係」、すなわちジャジマーニーが、結果的に、「下級カーストが上級カーストに抗して結束すること」を妨げ、「敵意の常態化」に歯止めをかけている、と考えているようである。しかし、彼の理解には、明らかに二つの問題点が認められる。一つは、彼の理解が、上層カーストと下層カーストとの二項関係のみに注目したものであり、上層、下層、それぞれの諸カースト相互間におけるねたみや敵意の有無、更にはランキングをめぐる軋轢や闘争などの問題を看過していること、もう一つは、敵意の「常態化」と「規範化」とを混同していることである。また、ヒンドゥー社会、特に村落社会において、「友情」という概念を用いることについても、その概念自体の再検討を加える必要がある、と私には思われてならない。

コーザーやブレインなどのヒンドゥー社会観を批判し、攻撃することは本稿の目的とするところではない。ただ、ここで取り上げた記述にみられるようなヒンドゥー社会観にとらわれているうちは、ヒンドゥー社会における文化変容やランキング

をめぐる諸問題，更にはカーストの変動や「近代化」の諸問題を正確に理解することはできない。このことを私は述べておきたかったのである。

## 2

ヒンドゥー社会においては，諸カーストのランキングが，ブラフマンを頂点とした，いわゆる「浄-不浄」のレベルによって決定されるものであることは，周知の通りだろう。しかし，浄-不浄のレベルの決定について，客観的，あるいは絶対的な判断の基準があるわけではなく<sup>(3)</sup>，同程度の「浄」あるいは「不浄」のレベルにある，とみなされる諸カーストのランキングは，常に問題となっている。たとえば，地域社会や日常生活などにおける状況を見捨て，「鍛冶屋」と「大工」とのランキングを一概に決定することはできない。また，一旦決定された諸カーストのランキングが，状況の変化に応じて，変動することも珍しいことではなく，（→本部〔1985〕），ランキングの改善を目指したさまざまな試みも行なわれる。ヒンドゥー社会における文化変容<sup>(4)</sup>の多くは，ランキングの問題と密接にかかわっているものであり，ここにおいてさまざまなねたみや敵意，軋轢，あるいは闘争などが生じるのである。

ランキングの改善を目指した文化変容の試みは，歴史上，特に「近代」に限って認められるものではない。たとえば，婚姻の形態に例をとってみる（→本部〔1987〕）と，上層カーストの婚姻形態と下層カーストのそれとの間には，〈表1〉に示すように，規範的には際立った相異が認められる（→本部〔1984〕）。しかし，下層カーストによる，上層カーストの婚姻慣習の模倣が古くから行なわれ続けてきたものであることは，既に確認されている<sup>(5)</sup>。ただ，社会の近代化の進展が，一連の文化変容を促進したことは事実である。

〈表1〉 婚姻形態と階層性 — 二分法的に —

要件 \ 階層	上 層	下 層
基本的な婚姻形態	贈与婚	売買婚
配偶者選択	花婿側に主導権 (女性の余剰)	花嫁側に主導権 (男性の余剰)
婚資の移動	花嫁側から贈与金	花婿側から花嫁料
花嫁の処女性	重視→幼児婚へと発展	あまり問題とされない
離婚・再婚	社会的な不名誉 →婚姻不解消主義	許 容
そ の 他	婚姻の儀礼としての重要性を強調	夫婦生活の事実を重視

シュリニーヴァスは，南インドのクールグ族の文化変容についての研究を進める過程において，それまで用いられていた，下層カーストによる上層カースト（南インドの場合，特にブラフマン）の文化の模倣を示す，「ブラフマン化 (Brahminization)」という概念に替るものとして，「サンスクリタイゼーション (Sanskritization)」という新たな概念を初めて用いている（→Srinivas〔1952:30〕）。この概念については，飯島茂が，シュリニーヴァス自身による定義を踏まえながら，以下のように定義している。

Sanskritization は，低いカーストや部族民が菜食主義を採用し，酒類の飲用をやめ，彼らの宗教儀礼や神々をブラフマンのような高いカーストのものと一致させることにより，ヒエラルヒーのなかで身分上昇をこころみる過程をいうのである（→飯島〔1966:347〕）。

また，サンスクリタイゼーションの社会的機能については，以下のように説明している。

Sanskritization は、ヒンドゥー社会において高い社会的地位を要求する方法を意味し、また、社会的上昇のためのメカニズムでもある。カースト制度のもとにあっては、Sanskritization は安全弁としての役割りをはたし、経済的・政治的に権力をもつ資格のある人々を一般に承認させることである（→飯島〔1966：353〕）。

更に、飯島は、「Sanskritization は組織を変化させない」ことを、その特徴として指摘している（→飯島〔1966：353〕）。このような、飯島のサンスクリタイゼーションに対する理解については、問題点はない。ここで問題とすべきことは、シュリーニヴァス自身の、定義上の「混乱」である。

ヒンドゥー社会において、下層カーストの文化変容と部族民 (tribes) のそれとは、その基本的な性格を異にするものである。すなわち、下層カーストの場合には、文化変容は「ヒンドゥー」の文脈のなかで行なわれるものであり、それによって、ランキングの改善を達成することも不可能ではないことは、これまで述べてきた通りである。これに対して、本来「非ヒンドゥー」である部族民の場合には、文化変容は、まず第一に、彼らの固有の文化を捨て、まったく異った体系の文化を受容する過程を意味することになる。また、文化変容の結果、仮に固有の文化をすべて捨て去ったとしても、彼らが、いわば「ランキング外 (out-castes)」の存在である、という状況は変化しない<sup>(6)</sup>。この意味においては、部族民における文化変容を、「高い社会的地位」を要求するための試みとしてとらえることは、必ずしも適当であるとはいえないことになる。

この問題について、飯島は、後者に対して「ヒンドゥー化」という概念をあて、両者を別個のものとして区別し、両者の相違点について、以下の

ように要約している。

低いカーストのSanskritization と非ヒンドゥー部族のヒンドゥー化の過程については、多くの共通点を包含しながらも、社会学的意義の若干の差異が認められる。すなわち、大づかみにいうと、前者はヒンドゥー社会の「質的充実」であり、後者は「量的拡充」である（→飯島〔1966：354〕）。

ここでは、飯島が、サンスクリタイゼーションという概念を、下層カーストの文化変容、すなわち、前述のブラフマン化の同義語に限定して用いていることがわかる。しかし、シュリーニヴァス自身についてみると、彼は、Shrinivas (1952) において、ブラフマン化という概念ではとらえることのできない、「非ヒンドゥー部族のヒンドゥー化の過程」に対して、ブラフマン化とは別個の概念を用意せず、サンスクリタイゼーションという新たな概念を用いることによって、両者を総括的に論じることを目指したものと考えられる。しかし、彼のこのような試みは、飯島の表現を借りれば、「質的充実」と「量的拡充」という、両者の基本的な性格を混同したものであるに他ならず、このことが、後年、サンスクリタイゼーションの理解に混乱を生じ、現在ではこの概念自体が、あまり顧みられることのないものとなっている<sup>(7)</sup>、という状況に陥っている遠因である、といっても決して過言ではないだろう。

私自身は、「下層カーストの文化変容」の文脈に限定して用いるならば、サンスクリタイゼーションは十分に有効な概念であり、私なりにこだわり続けて行きたい、と考えている。ただ、何を基準として「下層」と判断すべきか、上層でも下層でもない諸カーストの文化変容をどのようにとらえるべきか<sup>(8)</sup>、ということについては、更に検討

を加えて行かなければならない。

### 3

ここまで記述を進めてきたことを踏まえながら、サンスクリタイゼーションという概念について整理をすると、概略、以下のように要約して示すことができるだろう。

①サンスクリタイゼーションは、ヒンドゥー社会における、下層カーストの文化変容を示す概念であり、諸カーストのランキングの問題と密接にかかわり合っている。

②サンスクリタイゼーションは、集団（カースト、広義の親族集団など）を単位として行なわれる。

③サンスクリタイゼーションは、集団内外、特に集団外の「承認」をもって達成される。

本章では、上記のようなサンスクリタイゼーションの理解の妥当性を検証する意味から、具体的なサンスクリタイゼーションの試みをめぐる状況について、Pillai (1947=1986) から関連のあるいくつかの部分を紹介しながら、概観しておきたい。同書の主人公、チュダラマツーは、賤業視されている「清掃夫カースト (Bhangis)」<sup>(9)</sup>に生まれ、成長するに伴ってヒンドゥー社会の不平等構造の厳しさを認識し、強くサンスクリタイゼーションを指向するようになった。以下の部分において、彼は妻のバーリに対して、このような考え方を説明している。

いいかい、こういう生活は、俺やお前のためじゃないんだ。俺たちの子供のためなんだ。それには、子供が生まれてからでは遅い。子供たちは生れ、育った環境で“造られ”ていく。汚らしい清掃夫の、くそまみれの生活は、その生活を変えない限り、その子供たちも清掃夫で終るしかないんだ。俺はハイカーストの人たちの家を

見てきてつくづくそう思った。代々受け継いできたその家の家風や環境ってものが人を造ってゆくのを、この眼で見届けているんだ。だから清掃夫の子にしたくなかったら、俺たちが清掃夫の生活を止め、別のものに作り変えてゆかないきゃなんねえ、ってな (→Pillai [1947=1986 : 93]) 。

この言葉のなかには、ヒンドゥー社会における文化の階層性の問題、そして、下層カースト、この場合は不可触民 (untouchables) (→本部 [1986 b]) の人々の、サンスクリタイゼーションに賭ける気持が端的に示されている。彼のサンスクリタイゼーションの試みは、まず「家風や環境ってもの」の改善に対して向けられる。そのため、一人息子のモハンが生まれた後も、彼は頑なに、モハンとの「接触」を拒み続ける。これは正に、「不浄なものに触れるな」という、カースト・ヒンドゥー<sup>(10)</sup>の基本的な価値観を自らに強いた行動であった。

少し口がきけるようになるとモハンは、マーとバーリを呼び、ダーダー、とチュダラを呼ぶようになった。しかし、チュダラはそう呼ばれても決して返事をしなかった。バーリはそれを気にし何故返事してやらないのか尋ねたが、チュダラは頑なに口をつぐんだ。もちろん、彼は返事をしたくないのではないし、彼が可愛くないのでは毛頭ない。全くその逆なのだ。ただ、日に日に息子との接触が濃密になり、彼との“関係”が密になってゆくことによって、息子に清掃夫の臭いが染みついてゆくのを恐れたのだ (→Pillai [1947=1986 : 115]) 。

しかし、本稿においても繰り返し述べてきたように、サンスクリタイゼーションは、単に「その

家（あるいは個人）の家風や環境、ってもの」だけの問題ではあり得ない。ヒンドゥー社会においては、ブレインのいう、敵意や友情などはすべて、基本的には集団を単位とする（→Venkatasubramanyan〔1973〕）ものであり、このことを看過し、「組織化」が不十分なままのサンスクリタイゼーションの試みは、早晚、挫折する結果に終わる。チュドラマツの試みも、モハンが、5歳になったある日、やはり「清掃夫の息子」であるピチャンディ少年から、父親の職業が「清掃夫」であることを知らされ、大きな「壁」に突き当たってしまった。

「清掃夫の子はどこまでいっても清掃夫の子なのさ」

「そうだよ、あんた。そうじゃない振りしても仕様がな<sup>い</sup>よ。考えてもみなよ、あの子の結婚相手に、清掃夫の娘以外に来てがあると思う」

「うん、全くだな。だけど、バーリ、俺はモハン<sup>を</sup>絶対清掃夫にはしないぞ。あれは確かに清掃夫の子さ。だけどあれの子供たちはもう清掃夫の子じゃないんだ」

「だけど、その子だって、清掃夫の子供の子供には変り<sup>ない</sup>の、よ」（→Pillai〔1947=1986：123〕傍点引用者）

そして、チュドラマツは、彼のサンスクリタイゼーションの試みを成功させるいわば「最後の手段」として、教育の可能性にすべてを賭けた。彼は小学校の校長に、賄賂を握らせるなどして無理に頼み込み、ようやくのことでモハンの入学許可をとりつけるに至った。それまで、「清掃夫の子供」が小学校に入学した前例は皆無だった。

目一杯モハン<sup>は</sup>着飾り、毎日学校へ通った。清掃夫の子だと誰にもいわせ<sup>ない</sup>ためバーリとチ

ュドラはできる限りのことをした。小遣いもたっぷり持たせた。アレ<sup>ッ</sup>ビ<sup>イ</sup>初<sup>ま</sup>っ<sup>て</sup>以<sup>来</sup>の<sup>快</sup>挙<sup>を</sup>成<sup>し</sup>遂<sup>げ</sup>た<sup>興</sup>奮<sup>と</sup>満<sup>足</sup>感<sup>が</sup>や<sup>が</sup>て<sup>鎮</sup>ま<sup>っ</sup>て<sup>く</sup>ると、チュドラに心配が芽生える。このままずっとうまく行くのだろうか。夫婦はあれこれ話し合い、二人の懸念が一致していることを確か合った（→Pillai〔1947=1986：127〕傍点引用者）。

不幸なことに、「二人の懸念」は現実のものとなる。モハンが清掃夫の子であることが発覚し、教室中の敵意がすべて彼に集中することになってしまった。

暫く経ったある日、いつになくモハンは駄々をこねて母親を悩ました。昨日着ていったシャツも半ズボンも厭、タルカム粉をもっとふれ、香りのいい化粧石鹸で体を洗ってくれ、といい張る。昨日のがどうして厭なんだい。まだきれいなのに。バーリは叱った。

「ぼくが臭いって、皆鼻をつまんで逃げていくんだ」モハンは眼に涙をためていう。電気が走ったように、バーリは体を硬直させた。来るものが来た（→Pillai〔1947=1986：129〕）。

こうして、チュドラマツの試みは、挫折する結果に終わってしまったのである。

以上、いささか冗長にはあるが、Pillai〔1947=1986〕からの引用を通じて、サンスクリタイゼーションをめぐる状況が、多少なりとも明らかになったものと思われる。なお、付言しておく、チュドラマツの試みのような、一世帯、あるいは個人を単位としたサンスクリタイゼーションの試みは、所属カーストや親族集団の内部においても、ねたみや敵意を惹起することが多く、それだけに一層、挫折する結果に終ることが多くなる。従って、サンスクリタイゼーションは、必

然的に、ある程度以上の規模の集団を単位としたものにならざるを得ない。この意味において、厳密に判断するならば、チュドラマツの試みをサンスクリタイゼーションとみなすことは適当ではないのである。

集団を単位としたサンスクリタイゼーションの試みは、外集団、特に上層（上位）カーストの側に、ねたみや敵意を惹起する一方、内集団の組織化が順調なものである場合には、内集団の結合を再強化する契機となり、外集団に対する排他性も一層強化される。サンスクリタイゼーションの試みが一応の成果を収めた場合、そこには、いわば修正され再編された、諸カーストの新たなランキングが形成されることになるわけであるが、個々のカーストの基本的な性格は、何ら変化してはいない点に注目することが必要である。

#### 4

サンスクリタイゼーションという用語自体は、比較的周知のものとなっている。しかし、シュリニヴァス自身の混乱の問題を別としても、この用語が示す概念、一連の社会運動の意味が正確に把握されてきた、とはいえない。たとえば、『社会学小辞典』をみると、サンスクリタイゼーションについて、以下のような説明がなされている。

低位のヒンズー・カーストや部族や集団が高位のカーストの方向へと、その慣習・儀礼・生活様式を変化させていく過程。近代化によるカースト制度の解体過程を示すもの、シュリニヴァスの用語（→『社会学小辞典』：131）。

『社会学小辞典』にみられるようなサンスクリタイゼーションの理解が、その実状を正確に把握した上でのものでないことは、既に明らかである。本稿の一応の結びにかえて、ここで繰り返し強調

しておくならば、ヒンドゥー社会においては、社会の近代化の進展は、確かにサンスクリタイゼーションなど、さまざまな型の文化変容<sup>4)</sup>を一層促進し、カーストに対して「変動」の契機を与えはした。しかし、ここで注意すべきは、変動が直ちに解体に結びつかず、むしろ、変動を契機とした諸カーストのランキングの再編を通じて、ヒンドゥー社会の、いわば「再カースト化」の過程に結びついたという事実である。

本稿においては、結局、サンスクリタイゼーションという概念の検討を通じて、一つの「仮説」を呈示するにとどまった。すなわち、ヒンドゥー社会においては、近代化とそれに伴うカーストの変動とは、結果的に、社会の「再カースト化」を促進することになった、というものである。今後の作業の展開としては、地域（村落）社会における具体的な文化変容とランキングとをめぐむ状況についての実証的研究、部族民のヒンドゥー化、「カースト化」についての考察、そして、社会の近代化とカーストとのかかわりについての仮説の検証、という手順を考えているが、これらについては、稿を改めて、論を進めさせていただきたい。

#### 註

- (1) 私は、「カースト」という用語を、ヒンディー語の「ジャーティ」に対応するものとして用いている（→本部〔1986 a〕）。
- (2) 本文にも記したように、コーザーを批判することが私の目的であるわけではない。しかし、彼が社会的闘争についての著名な研究者であること、Coser（1956=1978）が「新しい古典」とまで賞されるほど、きわめてなじみ深いものであることを考えるならば、30年以上も昔の著作ではあっても、その誤ったヒンドゥー社会観は正しておく必要がある、と考えて、ここに引用した次第である。
- (3) 極端な表現をするならば、頂点に位置するブラフ

マンと、最下層に位置する不可触民・部族民(↳本部〔1986 b〕)以外のランキングを決定する基準となるものは存在しないのである。また、不可触民とされる諸カーストの相互間においても、ランキングをめぐる問題がみられないわけではない。

(4) 本稿においては、「文化」は諸カーストや部族などの集団を単位としたものに限定している。

(5) たとえば、上層カーストにおける「幼児婚」(↳本部〔1987〕)の慣習を模倣する、という口実のもとに、胎児のために婚約を結ぶ、という極端な事例すら生じていたことなどは、広く知られたものとなっている(↳Kapadia〔1955: 145-146〕)。このような一連の文化変容は、シュリーニヴァスの表現を借りれば、カーストの組織を損うことなしに、数百年もの間、進行し続けてきたのである(↳Sr-inivas〔1952: 30〕)。また、絶えず文化変容が進行し続けてきた結果として、文化と階層性の問題を、〈表1〉に示すように、単純な、二分法的な型で理解することは実際には困難であるが、ここでは一つの考え方を示すものとして、御理解いただきたい。

(6) 原則的には、異教徒、部族民、更には外国人は、

すべて「ランキング外」、あるいは「不可触民以下」の存在とみなされる、と説明されている。

(7) 甲田和衛教授の御教示による。

(8) 大藪寿一教授からは、サンスクリタイゼーションの概念の適用を、不可触民の文化変容に限定し、下層のカースト・ヒンドゥーの文化変容については、何らかの別個の概念を用いるべきではないか、という御指摘をいただいているが、遺憾ながら、どのような概念を用意すべきであるのか、結論を出せないまま、現在に至っている。

(9) 清掃夫カーストのサンスクリタイゼーションなどの詳細については、Shyamlal(1984)を参照。

(10) 不可触民に対する「可触」カーストの総称(↳本部〔1986 a〕)。

(11) 下層カーストのサンスクリタイゼーションに対し、上層カーストにおいては「西洋化(Westernization)」の方向が、一つの傾向として認められた(↳Béteille〔1969: 114-132〕)。しかし、すべての上層カーストが西洋化の方向をたどったわけではなく、また、西洋化の方向をたどった下層カーストが皆無だったわけでもない。

## 文献

Béteille, A. 1969 *Caste: Old and New*, Bombay.

Bouglé, C. 1908 *Essais sur le regime des castes*, Paris = 1943 藪中静雄訳『印度のカースト制度』, 大鷗社。

Brain, R. 1976 *Friends and Lovers*, London = 1983 木村洋二訳『友人たち/恋人たち』, みすず書房。

Coser, L. A. 1956 *The Functions of Social Conflict*, Routledge & Kegan Paul = 1978 新睦人訳『社会闘争の機能』, 新曜社。

Davis, M. 1983 *Rank and Rivalry*, Cambridge Univ. Press.

浜島・竹内・石川編 1977 『社会学小辞典』, 有斐閣。

飯島 茂 1966 「『ヒンドゥー化』についての一考察」, 川喜田・梅棹・上山編『人間 人類学的研究』: 343-355, 中央公論社。

Kapadia, K. M. 1955 *Marriage and Family in India*, Oxford Univ. Press.



- 本 部 隆 一 1984 「ヒンドゥー社会の婚姻制度について」(大阪市立大学大学院文学研究科, 昭和59年度修士論文)。
- 1985 「ヒンドゥー村落社会についての一考察」, 『人文論叢』13: 60-69, 大阪市立大学大学院文学研究科。
- 1986a 「ヒンドゥー・カーストの史的展開について」, 『人文論叢』14: 104-113。
- 1986b 「『インド文明』の底辺への視点」, 『比較文明』2: 241-246, 比較文明学会。
- 1987 「ヒンドゥー婚の理念と諸規範」, 『人文論叢』15: 37-53
- Pillai, T. S. 1947 *Scavenger's Son*, = 1986 山際素男訳『清掃夫の息子』, 三一書房。
- Shyamlal, 1984 *The Bhangis in Transition*, Inter-India Pub.
- Srinivas, M. N. 1952 *Religion & Society among the Coorgs of South India*. J. K. Pub.
- Venkatasubrahmanyam, T. R. 1973 *Group Prejudices in India*, Shri Ram Centre.
- Wiser, W. H. 1936 *The Hindu Jajmani System*.

(もとべりゅういち)